

卒業論文

製造業における開発プロセス改革の変遷

指導教授

斎藤 正武 准教授

中央大学商学部

学科 会計学科

学籍番号 04C2235013K

氏名 谷村 智恵

製造業における開発プロセス改革の変遷

学科 会計学科

学籍番号 04C2235013K

氏名 谷村智恵

所属 斎藤正武ゼミ

近年、経済のグローバル化により、安い人件費を求めた中国やアジア諸国への企業参入、日本の成熟した市場を離れ、それ以外の新たな市場獲得を目指した海外への輸出拡大など、製造業における企業間競争はこれまで以上に激しさを増している。この厳しい状況の中、企業はより多くの利益を得るため、「企画、開発、製造、販売」の一連のサイクルを迅速に進めるプロセスを改革する必要性に迫られている。開発プロセスを短期化することにより、市場へ製品を早く投入し、先行者利益を得たり、商品性の向上を図ることが可能となる。そして開発プロセスは、従来のような部門間のやり取りをバケツリレーのように繋げるウォーターフォール型の製品開発から、部門間の壁を取り除き作業を企画から並行・一貫して行うコンカレント・エンジニアリングが有効であるとされている。

コンカレント・エンジニアリングは1980年代にアメリカで発表、体系化され、理論的に効率的、且つ、有効であったが、企業の体質、企業間の連携の必要性、製品・開発の特性、IT技術の未熟など、様々な理由から成功事例が多く見当たらない。そこで、事例検証、実態調査を通して、コンカレント・エンジニアリングの実態を探ることが本研究の目的である。

具体的には、1) 文献による成功事例の分析と2) 成功企業への実態調査を行った。1) について17件分析を行い、企業ごとに成功事例を集め、その成功した要因と考えられるものを4つの項目に分け、表にまとめた。2) についてはダイキン工業のハイサイクル生産、四位一体活動、ITシステムとしてのALPHAシステムを分析し、また現地での実態調査を行った。

結果として、事業形態・業種ごとによる成功事例に特徴があり、年代ごとによるコンカレント・エンジニアリングの形態にも違いがあることが考察できた。

今後の課題としては、コンカレント・エンジニアリングに成功している企業事例の定量的評価、分析、また国内のコンカレント・エンジニアリングの事例調査だけでなく、海外の事例調査を行い、国や習慣によって成功例にどのような違いがでるのかを分析することである。